

社会調査の「比較社会学」的考察

田野崎 昭夫

一 昨年滞米していた時、ハーヴィード大学で大学院のコミュニティのセミナーに出席させてもらった。単位をとるわけでもなくオブザーバーとして出ていたのだが、そのきわめて熱心な雰囲気にひかれて御礼に何かペーパーを作つて皆に進呈しないと申しわけないような気がしてきた。幸いエンチン東洋文献図書館に以前に発表した「釜石調査」(社会学研究一七号)が収蔵されているのを見つけた。そこでこれを、調査時点以後の変化四項目などをもじこんで図表ともタイプ用紙三〇枚ほどに英文で要約して皆に配り、余った分をお世話になつた諸先生にも差上げたところ、ベル教授をはじめ多くの方から大へん面白かったとほめて頂き、ほつと胸をなでおろした次第であった。ただその際、感じた点が二つほどあった。

一つは調査対象(地)を実名で公刊報告書にのせていくことを、かれらが興味深く感じていたことであった。よく文句を言われない

ですむものだ、何かうまい方法でもとっているのか、と言いたげであった。アメリカではコミュニティ調査は大体仮空の地名で刊行されている。たとえばウォーナーのヤンキーシティはマサチューセツ州北部のヌーベリポートという海岸町であるし、リンクのミドルタウンはインデアナ州のマンシーであり、ウェストのブレンヴィルも仮名である。個人のプライバシーや地域社会の共同の名誉に対する配慮によるものであろうが、むしろわれわれはその背後に調査倫理と調査戦略の問題を感じる。あまりに批判的な態度で調査に取組めば警戒され拒否されることがあるし、また迎合的な態度では科学的な成果は得られ難いであろう。戦後の当座なんでも民主化の時代で農村調査もこれを大義名分として調査できた時期は過ぎているし、好事家の調査では十分な組織的な成果は難しいであろう。農村が抱えている問題に農民の立場にたつて取組む態度こそが大切なのであらうが、そこでも調査対象内に集団的または階級的対立が強い場合はやはり困難と限界がつきまとつてゐる。アメリカでもヴィデイチとベンズマンがニューヨーク州のイサカの農村コミュニティを調査して「大衆社会における田舎町」を著したが、スプリングデールという仮名を用いたにもかかわらず批判的な分析だったため地元の抗議を買いつづいて住民は両名の入形を作つて焼くという事態にまで発展したことがある。その後両名が中心となって地域調査に関する諸問題をとりあげ論集「コミュニティ研究の反省」を刊行している。

第二に感じたことは、日本人が日本のコミュニティを調査したモ

ノグラフが意外に外国に知られていないことである。日本人の書いたものは概説的なものや日本社会全体を扱かったものが大部分であって、英文での生のモノグラフはまず見当らない。却ってエンブリー「須恵村」、ドーア「都市の日本人」、ボーゲル「日本の新中間階級」といった外人のものが目立つのである。だからどう簡単なベーバーであつたにもかかわらず、われわれのモノグラフを珍重してくれたのかもしれない。それで思い出されるのは、ボーゲル氏に日本研究から中国研究に重点を移行させた理由を訊ねたところ、日本語が少しわかるようになつて日本へ行つてみたら、日本における日本社会の社会学的研究は非常にすぐれたものが沢山あることを知つて外人の研究する余地はなく、これに対しても中国では中国人自身の中国社会研究が少ないからである、と説明してくれたことである。逆にみれば、外国の日本社会研究は概説的なもの一次的なものではもはや満足しないほどに進んでいて、しかも言語の事情のために生の資料やモノグラフに飢えているのである。この意味でわが国はいまや社会学研究の輸入だけでなく輸出の時代にきてるのであるが、それは外人観光客向けに作られたみやげ品ではなくて本格的研究者のための本格的な輸出品でなければならないのである。しかしながら現在のところでは、せめてエッセイズを圧縮したものでもよいから村研各会員のすぐれた業績が海外に紹介されるならば、日本の学問的水準が国際的にももつと評価されるであろうと確信するのである。